

多彩性がなく小球状を呈する糸球体型赤血球出現時の検査所見の傾向について

◎服部 亮輔¹⁾、山本 幸代¹⁾、里吉 和也¹⁾、安藤 秀実¹⁾、浄土 雅子¹⁾
日本大学病院¹⁾

【はじめに】多彩性がなく大部分が2~4 μm の小球状を示し、詳細に観察すると不均一構造が確認できるタイプの赤血球は糸球体型赤血球に該当する。この多彩性がなく小球状を呈する糸球体型赤血球（以下、小球状赤血球）と、それ以外の糸球体型赤血球（以下、小球状赤血球以外）出現時の検査所見は違う傾向を示した。【方法】〔対象〕小球状赤血球：80 検体、小球状赤血球以外：100 検体〔方法〕①血清クレアチニン、eGFR の分布、②尿定性検査〔尿蛋白（1+）以上、尿潜血（1+）以上〕の陽性率、③尿沈渣成分の陽性率を比較した。【結果】小球状赤血球：年齢；5~88 歳、性別；男性 55 検体、女性 25 検体。小球状赤血球以外：年齢；3~92 歳、性別；男性 59 検体、女性 41 検体。小球状赤血球の内訳：IgA 腎症；3 症例、巣状糸球体硬化症；1 症例、同一症例から複数回検出；6 症例、①小球状赤血球の血清クレアチニン平均値 0.90 mg/dL（小球状赤血球以外、以下材料名省略：0.86 mg/dL、 $p=0.62$ ）、eGFR 平均値 65.6 mL/min/1.73m²（64.8 mL/min/1.73m²、 $p=0.32$ ）、②尿定性検査陽性率は、尿蛋白（1+）以上：22%（40%）、

（2+）以上：6%（20%）、尿潜血（1+）以上：85%（95%）、（2+）以上：54%（80%）であった。③尿沈渣検査陽性率は、尿細管上皮細胞 81%（79%）、硝子円柱 17%（29%）、顆粒円柱 14%（20%）、ろう様円柱 0%（3%）、赤血球円柱 24%（26%）、上皮円柱 28%（33%）、脂肪円柱 1%（10%）、卵円形脂肪体 1%（8%）であった。【考察】形態的に多彩性がなく小球状を呈する糸球体型赤血球が認められる検体は、それ以外の糸球体型赤血球と比較すると血清クレアチニン、eGFR の値に有意差を認めなかった。しかし、尿定性検査の尿蛋白、尿潜血の陽性率は低値傾向を示し、尿沈渣成分の陽性率においても硝子円柱、顆粒円柱、上皮円柱、脂肪円柱、卵円形脂肪体などが低値傾向を示した。同じ糸球体型赤血球でも、小球状を呈する糸球体型赤血球が認められるときは、糸球体の障害が軽度である傾向にあると考えられた。また、6 症例で複数回に渡り小球状赤血球を認めたことから出現に関与する患者背景、糸球体障害の程度、病態があると推測された。連絡先：03-3293-1711（内 3346）